

ボクサー

サイトー

「ダイエットにチョコレートですか」

将来を囑望されている女性リポーターは不思議そうにマイクを向けた。若手ボクサーはウインクをしてきた。

「ウエイトコントロールにチョコレートとは意外だろ。いくら天才とはいえ体重管理はそれなりに工夫が必要なのよ。君も知ってる？ おれが将来のホープとしてスポーツ誌の一面を飾るのを。最近はファッションモデルの依頼までされて困っているんだ」

若手ボクサーは右腕を女性リポーターに伸ばしてきた。練習中だというのに銀のプレスレットをはめている。右手には金の指輪が輝いている。女性リポーターは肩を抱かれそうになり、寸前で体をひねってかわす。

若手ボクサーは「わりい、わりい」と軽く答える。女性リポーターは少し眉をひそめながらレポートを続けた。

「チョコレートはカロリーが高いのでダイエットの天敵だと思うのですが」

若手ボクサーは人差し指をたてて左右に振った。ときおり自慢の

長髪をかきあげる。指が金髪を通過するたびに香水のにおいがした。わざと香りをかきたてているような感じだが、同時に汗の臭いまで漂ってくる。酢とリンスを混ぜたような感じだ。

「君も分かっているいなあ。ダイエットとウエイトコントロールとは別物なんだよ。ボクサーという職業は体を入念に作り上げ、試合直前に10キロ落とすのよ。そうなるとカロリーは関係ねえ。最終的には食べた量の重さなんだ」

インタビュ中、仲間のボクサーが様子を見にきた。若手ボクサーは疎ましそうに追い払う。若手ボクサーは立ち上がると、急にシヤドーボクシングを始めた。女性リポーターを中心として華麗なステップで回り続ける。汗が飛び散り、女性リポーターの顔まで降ってくる。女性リポーターはできるだけ表情をかえないようにハンカチでぬぐった。

ボクシングジムはサウナ室のように熱い。若手ボクサーは汗でぬれたTシャツを脱いだ。胸板が生き物のように動いている。

若手ボクサーは女性リポーターに流し目を使うと、なぜかポーズングをしてきた。よく見ると力瘤に「愛こそ命」と刺青がしてある。なんだ、これは。次は背中を見せてくる。若手ボクサーが力をいれるたびに、刺青の翼がパタパタと羽ばたく。

どうやらこれが自慢の一品らしい。ひととおりポーズングが終わ

ると、若手ボクサーは満足そうに話を続けた。

「おれみたいに鍛えている人間だと1日で1キロぐらい体重が落ちるんだな。それだけ激しい練習をこなせる体を作っているということだな。それでだ。水を1日500グラム飲むとして、どうしたら重さを増やさずにエネルギーを摂取できるかというわけよ。つまり少ない質量で高カロリーの食材と言えば」

「なんででしょうか？」

話を引き出すためにあえてとぼけてみた。若手ボクサーは「わからないかなあ」と素で返してくる。しかたがない、と女性レポーターは思った。

「チョコレートでしょうか」

ビンゴだ、と若手ボクサーは親指を立てた。もつともおれがチョコ好きというのもあるけどな、と付け加えてきた。

最後に若手ボクサーは女性レポーターにサインの押し売りをしてきた。頼んでいないのに携帯番号まで書かれた。しかもサインより大きい。おまけにハートマークとチョコの絵が描いてある。「緊急事態、在庫が尽きかけ」とある。チョコレート程度でオーバーな。

「試合を楽しみにしていますわ」

女性レポーターがお決まりの挨拶をすると、若手ボクサーは舞い上がらんばかりに喜んだ。

試合の当日になった。

若手ボクサーは携帯電話の画面を見つめ続けていた。控え室に運ばれたプレゼントの贈り主を何度も確かめた。入場してからは会場を何度も見回した。特に記者席は念入りに確かめた。アナウンスの声にも耳を澄ませた。そうしてため息をついた。

今日は2月14日だ。あれだけアピールしたのになぜ女性レポーターからチョコレートが届かないのだろうか。テレビ局のインタビューを受ける条件として、あの女性レポーターを指名したことを彼女も知っているはずなのに。このおれがふられた？ そんなバカなおれは若手のホープでボクシングの天才で、おまけにファクションセンスは抜群で、しかもインタビューは最高の雰囲気だったのに。彼女の笑顔を見る限り、女性レポーターはおれに好意を持っている。これは間違いない。それなのに、なぜバレンタインデーのチョコが届かない……。

こうして雰囲気を読めない若手ボクサーは相手がカウンターを狙っているのにも気がつかず、不用意にパンチを浴びてあっけなく試合に敗れた。